
暖かい魔法

うだる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暖かい魔法

【著者名】

うだる

N7253R

【あらすじ】

夜のバス停でのちょっとした出会い、としかかけません。

(前書き)

いたつて普通の、至らない事の多い文章かと思いますが。

2月も終わりに近いのに、夜の風はいまだに冷たい。昨日はあんなに暖かかったのに、今日はまるで雪でも振るんじゃないかと思つほどに寒い。

バス停で待つ私に時折吹き付ける風が痛いくらいに冷たく、外部にさらされた顔や耳を容赦なく冷やす。これだけ寒いと実家を思い出す。森田美紀の実家は田舎といつほど田舎ではなかつたが、都会と言つにはちよつと寂しい、そんな街だった。

向ひの冬は更に寒く、よく雪が積もつていた。

そんな所に住んでいたのに、すっかり体が感覚を忘れたのか、都会だといふに実家より寒いと感じていた。かさねてこの薄着ではしょがないのかもしれない。昨日が暖かく、今朝も心地よい暖かさを保つていたのに、夕方から夜にかけてがくんと気温が下がつた。

油断した、としか言ひようが無かつた。今朝何気なく掛けてきたメールが愛おしい。抱きしめてあげたい。

携帯を開き時刻を確認する。それからバス停にある時刻表に目をむけ、現在の時間と照らし合わせた。後5分でバスが来る、順調に来ていいればの話だけど。都会は日によつて交通の量が激しく変わり、バスが遅れるなんてことはよくあつた。もしかしたら今日も遅れる可能性が無いわけでもない。

5分が辛い。むくんだ足をパンプスがきつて締め上げる。足の先は寒さで感覚がほとんどないが、手で触るとびっくりするほど冷たい

であることは想像にたやすい。足を休めるためにもベンチに腰を掛けたいが、この寒さの中、金属製のベンチに身も心も預ける気にはまるでなれなかつた。

唯一の熱源であるカイロが手の中で私を暖めようと熱心に働いているが、どうにも頼りない。しかし、暖かいことには代わりはないので両手で揉むようにカイロで暖をとる。

この時間にバスに乗る人は少ない。道行く人は温かい格好をして家路を急ぐ人ばかりで、みなバス停の前を通り過ぎる。背中を丸めてとぼとぼと歩くサラリーマン風な人や、遅くまで遊んでいたのか制服姿で歩く女子高生など様々な人が居る。あんなに足を出して平気なのだろうかと、女子高生を見て思つたが、私もちょっと前まであんな格好で闊歩していたことを思い出すと、ふと懐かしく感じた。

高校を卒業して、すぐに私は都会の大手電話会社に就職した。周りのほとんどが大学へと行く中、私は就職への道を選んだのだ。同級生たちと会えなくなると寂しくも思つたが、いざ離れてみると言つほど寂しさを感じなかつた。

みんなはどうなんだろう。私が居なくなつて寂しいとは思わないのだろうか。それとも、今頃みんなでキャンパスライフを楽しんでいて、もしかすると私のことなんてすっかり忘れてしまつているのかもしれない。そう思つと、ちょっとだけ悲しくなつた。

そんな事を思いながらバスを待つていると、やたらと薄着な女性が歩いてくるのが見えた。上にパークーを羽織つているが前は閉じられることがなく、中にはノースリーブのシャツを着てているだけだつた。下はジーンズをはいているが、ダメージジーンズというのだろうか、所々スカスカで見るからに寒そつた。頭には大げさなくらい大きなヘッドホンをつけている。

しかし、その人はまるで寒さなど感じないのか平然とした顔で歩みを進める。音楽を楽しむ余裕もあるようで、頭を小さく揺らしている。活発そうな顔立ちで私より年齢は上に見える。そんな風にじっくり観察していると、目があつた。

ジロジロ見ていた私は、視線を外すのが一瞬遅れてしまつかりと目を見てしまつた。相手はちょっと驚いたような顔をしたが、別に怪訝な顔をするわけでもなく歩みを進めた。しかし氣のせいだらうか、その足は私の所に向かつてきているように見える。

やばい、何か言われるかもしれない。

都会の人は気が短いイメージがある。だからというわけではないが、この時直感的にそう思った。

その女性は歩く速度を落とすことなく真っ直ぐに私の所まで来た。やつぱり何か言われる。頭にかけたヘッドホンを外し、こちらを見て一言

「こんばんは」

そう声をかけてきた。いきなり文句を言われるんじゃないかと思つた私は一瞬戸惑う、けれど直に気を取り直し自然を装つて言葉を返す。

「あ、こんばんは」

緊張と寒さで、声がちょっとわざつてしまい変な声になつてしまつた。そんな事は気にならないのか、それともそれを笑つたのか、につこりと笑顔を返してきた。

「バス待ち？」

「はい。なかなか次のバスが来なくて」

そういうつてから自分で携帯へと視線を落とすと、すでに5分が過ぎていた。やはり混雑しているのだろうか。

「やつぱり。ここバスよく遅れるんだよね。こんなに寒いのに参つちやうでしょ」

「そうですね」

思わず無愛想な返事になつてしまつた。初対面の人と話を弾ませる、という芸当は私には難しい。昔からなのだ。

首にかけたヘッドホンから軽快な音楽が流れる。どこかで聞いたような曲だと思った。邦楽だらうか。そもそも私は邦楽しか知らないのだけれど。

「その上その薄着じやあ、子鹿みたいに震えるのも納得だよね。遠くから見てもわかるくらいに震えてたよ」

そう言ってカラカラと笑った。この人なんて私より数段上の薄着（言い方が変だろうか）なのに、人のことを笑えるんだろうか。少なぐとも私よりは寒いはずなのに。

「あの・・・あなたは寒くないんですか？」

「ん？ あたしは寒くないんよ」

そういうつて「ほら」というとその場で一回転する。そこで回る意味はよくわからなかつたけれど、寒くないという事は本当らしい。少しあだけたパークーの隙間を見ても、カイロのようなものは見当たらない。近年見るようになつた塗るホッカイロでもつけているのか、それとも足元にカイロでも入れてているのか、どちらにしたつてその格好だと寒くないはずがない。

その人が動く事によつて生じた風でさえ、私は寒いというのに。それから私をまじまじと見ると、こう言つてきた。

「ねえ、あたしが暖めてあげよつか？」

言つている言葉は理解できだが、意味がよく汲み取れなかつた。私を暖める、ということは私に暖をとらせてくれるという事だろうか。目の前にいるこの寒そうな女性（寒くないといつている）がしていふような塗るホッカイロ的な物を分けてくれるのだろうか。分けてくれるとして、わざわざ私はそれを塗ろうとは思えない。

それにとり方によつては、その言い回しはまるでナンパの口説き文句の用にも聞こえる。つまり凄く・怪しい・という事だ。

私は咄嗟に口を開く。

「いえ、私もカイロはもつていますから、大丈夫です。」

そう言つて手を開いて差し出す。くしゃくしゃに揉みしだかれたカイロが手のひらでぐつたりと横たわつてゐる。そんな状態でもまだまだカイロとしては元気な用で、手のひらをほのかに暖め続ける。そんなカイロを見て、ちょっと困つたような顔でその人は笑つた。

「そんなんのじや寒いでしょ。それに大丈夫な人は子鹿みたいに震え

ないんだって」

そつ言うとそつと手を伸ばし、私の腕をつかむ。恐怖と驚きで思わずびくっと体が震えた。口はパクパクと開くが、驚きすぎて声にならない。

そのままもう片方の手を伸ばし、両手で私の左手を包み一言「怖がらないで」と囁いた。

そういうわれても、と思う。頭は冷静に働いていないし、何かを言おうとしている口も声になっていない。そもそも何を言おうとしているのか私にもわからなかつた。

そのまま顔を近づけると、ふうっと息を手に吹き込んだ。暖かい空気が丸められた手の中に広がり、それから腕をつたつて上つてきた。

「手は丸めたまま開かないで。大丈夫すぐに暖かくなるから」既に手は放されていて、私の手は自由になつていて。

それから改めて氣づく、手の暖かさが腕を伝つて上り、体に広がつていつている。既に周りの寒さは感じず、それどころかまるで暖房のついた部屋に居るような快適さだ。

「こ、これつて・・・どうなつて」

「どう? 暖かいでしょ?」

「あ、はい。暖かいですけれど」

「よかつたよかつた。手を開けば元に戻るから、暖かい所に行くまではしっかりと握つておくんよ?」

「あ、えつと」

「それじゃ、気をつけて帰りなさいよ」

そういうつて手を振ると、何も言えなくなつている私を置いてけぼりにして背中を見せる。首に下げたヘッドホンをあげて、耳に当てようとしたので慌てて叫んだ。

「あの!」

大きな声を出しすぎたかもしれない、一瞬周りの視線が私に集まる。

思わず恥ずかしくて、身を縮めてしまつ。女人の人もびっくりしたのか変な姿勢のまま固まつてゐる。それから振り向く顔は予想通り驚いた表情をしていたが、構わず私は言葉を発した。

「ありがとうござります。あなたはいつたい・・・」
何なんですか？ そう言葉を続けるつもりだった。けれど、そう続けるより早くその人が口を開いた。

「あたしはね、ちょっとした魔法使いなんよ」

そう言つて照れくさそうに頬をかくと、さつと前に向き直つてヘッドホンを耳にかけた。その後は振り返ることもなく歩いていった。私もあえて言葉をかけることはなかつた。

「ちょっとした魔法使い・・・」

そう呟くと、私は自然と笑みをこぼす。変な人だつた。

後ろ姿はもう見えない。入り組んだ都會の地形がそうさせたのだろうが、魔法使いなんていう言葉の所為で、まるで煙のように消えてしまつたのではないかと私に想像させる。

そんな思考を中断させるように、ようやくバスが到着した。プシュツという音を立ててバスのドアが開く。降りる人はいなく、乗る人も私一人。バスの中もがらんとしており、どこか寒々とした雰囲気を感じたが、魔法使いのおかげで私の体も心も、ぽかぽかと暖かかつた。

また明日会えるだろうか、あの「魔法使い」に。そう思つと、明日もまた寒くても悪くないなと思つた。

再び音を立ててドアを閉じると、バスは静かに発進した。冬があけるには、まだまだ長い。そう思わせるような夜の出来事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7253r/>

暖かい魔法

2011年10月8日22時46分発行